

tab

No.
8
2008
/01
/15

後藤美和子
鈴木夕伽莉
石川和広
野村龍

長尾高弘
岩田英哉
倉田良成

榊 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

後藤美和子：水源地／01

石川和広：そういうところ／02

長尾高弘：御輿／05

野村龍：芭蕉／07

鈴川夕伽莉：マモちゃんは寝ている／08

贈答詩

岩田英哉：川に酒精が流れる／10

倉田良成：水をさがして／12

文

石川和広：人身犠牲について／14

岩田英哉：言語とは何か／16

倉田良成：言葉の零と「空」／19

あとがき集／23

画：和田彰

13p 第8号／2008年1月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

T 230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kaitais11@k3.dion.ne.jp

An abstract painting featuring a central, torn strip of purple paper with handwritten text. The background is a complex, layered composition of colors including blue, white, grey, yellow, red, and black, with visible brushstrokes and splatters. The text on the strip is written in a cursive script.

*Allegro Energico
e passionato*

後藤美和子

水源地

通りの名

消えてゆく虹に

近寄って手をかざす

膝をついて

橋のたもとに腕を巻き

流れる稜線の

擦れて重なる音を聞いていた

森の名

片方の礎は湖に浸っている

雨の日に

水滴が輪をなして祝福する

一度だけ触れ

水の中に消えてゆく

かもしかが通り過ぎる

額の中に

覚えている曲がある

左耳がそれを聞く

右耳の世界は音もなく

揺れもなく

それでも広がるランプ色の

光源を背にした輪郭の指

(皆既蝕第三九号)

そういうところ

なんでやろう

おふとんのことをおもう。

だけとおふとんは

真剣にかんがえるのは

むずかしい素材だ。

この世界の、背中があり

お腹があり、足があり

それにふれる面が浦で、まて面で、みずうち、そよぐ

はた、うぶげ、あつくん、ふとっている

とてもびんかんにできている

素材はいろいろ。

でも、受けとめて

押しかえす

そこ、どこなのだろうか

ふとん

いわしは浮かんだまま眠って

ふとん

光そのもののように青く刺すはずのうろこが

まったくビロウドみたい

音をすいこんでしまっ

あぶくさえ、にぶく物憂げな

水でさえ、こんにやくみたい

眠ることはときどき物憂い

夜でなくてさえ、とうとうと、気短なからだを
どこまでも中空におよがせつづける

モノトーンの万国旗

そう思うとふとんが横たわり、おしこめる

僕のからだを

そのときどきの手ごたえで、

反発し急にわらい

なだめるように

その中へ誘いつづける

だからもつと奥へ入れば

かたちをうしなえるようで

とおくから、一千里よりとおくそこはとおく

はなす、はなしつづける、やがて未明の方向へ落ち続ける

ひなた、城の周り、鳥、人馬、ウシ

ビルのガラス

放射線、チリ、涙

ひなたから

石の水

ひかげから

草の墓

あたらしい

そこは

道の上で

餃子の王将のはるか

近く

瘦せたからだだが地面にたたきつけられ
息をふき、くらいそらのおいの中から
光をみている

窓のほうをみている

伸び

顔をかくす。

まくらにお鼻をつけて

時間をたしかめて

いつか読んだ本の中の

時間はもしかして

君の涙や僕と寝ていたおとうさんや

まっぷたつの騎士やおとうとの

仲良しの思い出かもしれない

おふとんはおはなし

のうまれてねむる。

そういうとこ

御輿

母は神だったので裸でいた。

村の礼拝所で数日ずつ過ごした。

どこからともなく村人たちが集まり、

母を拝んだ。

男たちは薄目を開けて拝んだ。

何のご利益があるのかは知らないようだった。

集まる人が少なくなると、

次の村に移動した。

移動するときには御輿に乗った。

私たち子供が御輿を担いだ。

見物がいなくても御輿に乗っていた。

普通、見物はいなかった。

ときどき御輿の扉を開いて、

西日を浴びた。

しばらくすると子供が増えた。

そういえば、私たちは神の子だった。

母は神だったが、

次第に老いていった。

ある日死んだが、

遺骸はなかった。

次の日から、

私たちのなかの一人が裸になり、

神になった。

残りは相変わらず神の子だった。

神の子でも、

死んだときは、

遺骸を残さなかった。

私たちは村がなくなるまで、

旅を続けた。

もう神はいない。

野村龍

芭蕉

疲れた瞳は

僅かばかりの水を飲み

やがて咲くために

再び眠りに就く

夢みるのは 黒揚羽の旋律

それとも 大理石に秘められた

Paracriceras aff. elegans の夜の光？

彼方を飛ぶ蜉蝣から

人魂の赤い歌が流れ出し

今日も

明日も

暖かな少女の日記に

静かに染み込んでいく

マモちゃんは寝ている

ラジオがちいさい声でコルトレーンを歌い始めたよ

マイ・フェイバリット・シングスは

私の実家のお父さんが大好きなんですよ

ねえ、おかあさん

ちいさいマモちゃんのおかあさん

私は思わず「コルトレーンですね」と呟いた

けれども気恥ずかしくてちいさい声なので

聞きとれなかったのだろう

マモちゃんのおかあさんは笑う

「そう、コロっとしたウンチです今日のマモちゃんは」

マモちゃんは寝ている

昨日の化学療法で身体がだるいのに

まだ言葉を知らないから あーあーうーうーぐずぐず

なんかへんだなああって眠れなかったんだ

今朝になってようやく眠っている

マモちゃんの

おかあさんは眠らずちいさい音でラジオを聴いている

テレビカードはお金がかかりますからと

また笑ってみせる

病院でラジオの電波は大丈夫ですか

大丈夫ですと答える前から

そこらじゅうを飛び交ってますから どうぞつかまえて

時々コルトレーンを歌ってくれるなら素敵じゃないですか

病院だから電波は悪いですが

音に乗らない揺らぎが

すやすや眠るマモちゃんの夢に足跡を残して

今はコロっとしたウンチで構わない

ただ 白血病細胞なんかより

ずっとずっと長い命のサキソフォンが

あなたの耳に届く日が

訪れますように

マモちゃんは

寝言にならない寝言でうーと言う

岩田英哉

川に酒精が流れる

川を挙げると言われれば

なんといつても

相模の国の酒匂川

その字面をみただけで

そのまま

岸辺に居ついて

春夏秋冬、毎日

酒を飲んでいたい。

その次が、また

ハイデルベルクを流れる

ネッカー川

この川べりの居酒屋で

やはり、何はともあれ

毎日ボック・ビアを飲んでいたい

それから、な

ハインツの家の庭のそばを

流れるバツハと呼ぶべき

ライリンゲンの小川かな

胡桃の木の下で

椅子に腰をおろして

秋の一日

ダクセンフランチ

このビールを逃さばや

おお、ブライト・ブルストよ

三途の川にも

酒精が流れ

ソーセージの匂いがする

水をさがして

わらってしゅんぶうにむかうはじめてこじゆう
笑向春風初五十

おえていわんやめいをしりかつひをしると
敢言知命且知非

―杜牧

水が匂うのは河の光が射すから

めざめれば

密かな太鼓や

葡萄

くさぶえのように

軀のなかへせせらぎおちる多摩川

みがかれた水滴の

白髭神社

長じては、堰堤のコップ酒

鴨川沿いの

巫女の親戚がいる居酒屋の屋根に

赤い小さな竜みたいにうねり泳いでいる旗

曼荼羅はほのかだから

あそこのパーシモンの木の丸椅子で

北方の悪漢のしぐさをつかい

おやじ、コーリヤン酒^{チキ}をもつてこい

大蒜も添えて、な

なければ透きとおった岩塩でいい

ゆっくりと細いあごひげを撫でるのだ

書懷の詩を読んで、銅鑼は

千年の韻をひびかすのか

鳥居を抜け

白丁を着た秋がふいに消え

ことしはるり色の萩が閃きつづけて
ながすぎる装飾樂句みたいにいつまでも止まらなかつた
おお、酔いがとまらずよ

絶対のくさむらの金声のさなかでめらめらと青い

瑪瑙のごとく

つめたい水が燃えている、河越しに

蕎麦をふるまわれ

飲めと陶をつき出され

諾々として

酔いがとまらず

円窓の向うに、初しぐれ

猿も小簀をほしげ也

人身犠牲について

こないだ藤井貞和氏の立命館大学での講演会に行ってきた。「詩と戦争」というテーマは非常に語るのが困難な課題だ。残念ながら湾岸戦争における詩人たちの論争を私は詳しく知らない。そこから様々な論者がどのような課題をこれまで展開してきたか、そしてそれに対して自分がどのような立場をとれるかは今はわからない。

ただ、藤井氏が「人身犠牲」について論じていたことに特別の興味を覚えたので、自分の想念を書いておきたい。私にとっても「人身犠牲」は大きなテーマだった。自分が学生時代受けた暴力（いじめ）には犠牲の構造があるのではないかと思ってきた。しかしそれをあまり大きく学問的に考えるよりも、私は自分とみんな（全体）との関係の一例として考えたいと思った。最初は自分だけがこのような目にあうのはなぜかという理不尽な感覚から考えた。しかし実は中野富士見中の「葬式ごっこ」を始め自分より大きな社会にたくさん存在していることを知った。「葬式ごっこ」とは何か。長い間同級生から殴られたり精神的に苦しめられたある中学生がいた。死んでもいないその子が教室に来る前に同級生のあるグループが机の上に花瓶を供え、クラス大勢の寄せ書きをおいたのである。当時は軽薄な時代で、その子も同級生も悪い冗談として受け答えしていたが、深いショックを受けたその子は自殺してしまっただのである。それからというもの、知らない間に死んだものとして扱われる、つまり殺される、それが儀式の形をとるということが頭から離れなくなった。なんといいってもその子が私と二才しか変わらないのが大きかった。

単に自殺した子に同情するだけでない、その構造を変える考えはないかと思った。それ

から大まかにいじめにおける犠牲の構造を考えた。少し整理するところである。人が集まっている場所がある。それが自由を奪う（例えば先の話だと学校）いびつなものだとして、様々ないびつさが問題や不満を生み出す。ここで、その場所の前提をみなで変えることができれば問題ない。しかし、それをしない・できないから、なかつたことにするために象徴的に誰かを血祭りにするという解消法を思いつくのだと考えた。

藤井氏の議論を参照する。民俗学の柳田國男は加藤玄智との論争で、「人身犠牲は日本社会にずっと存在した」とする加藤の論に反対した。しかし、その柳田が『一つ目小僧その他』という論文等において、「人身犠牲」の存在自体は肯定するようにシフトしたのだという。これは推測でしかないのだが最初柳田の念頭にあったのは「日本人が和を大切に民族だからそのような暴力はしない」という感覚ではないのだろうか。しかし、和を大切にすることからこそそのために誰かを犠牲にすることを済ますという構造が存在するのではないかとこの考えが私の頭をかすめるのである。犠牲の構造は人類が生み出した一つの知恵である。それは我々が今や想像もできないような苦闘によってできたのだろう。藤井氏は実は戦争も「人身犠牲」というやり方では内部の問題が処理できなくなっただけ、それを外化する一つの知恵かもしれないという。それは更なる犠牲を生み出した。しかしそれらの方法がなぜとられたかを考えないと戦争という仕組みを変えることはできないという。さらに私が思いだすのは「聖なるもの」と戦争や犠牲がどこかで関わっているのではないかとこのバタイユの問いだ。

犠牲の構造によって消された問題はその時

点で解決が難しいから犠牲を引き出してしまったのだ。とすれば依然問題は残っているはずだ。消された場所から問題の痕跡を取り出すことで、問題を知り誰かを抹殺しない方向で問題を考えることはもしかしたら可能ではないか。それが誰かが死んでしまった後でできる、せめてものこともかもしれない。恐らくそれが暗いけれど希望の内実かもしれない。

岩田英哉

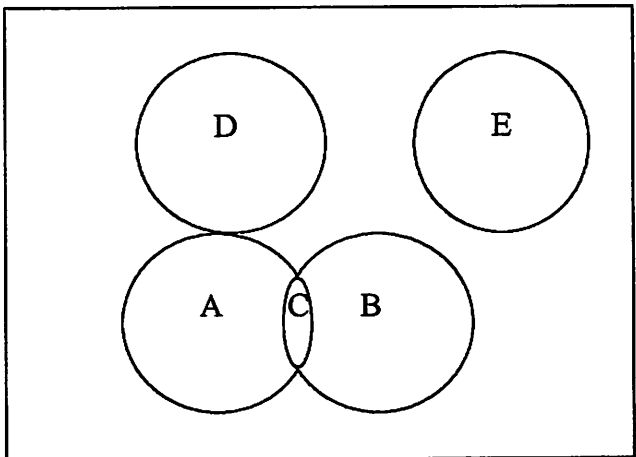
言語とは何か

言語とは何か

という問いを、また子供のときに問うたことがある。それ以来、生活の中で折に触れ、繰り返し言語について考えたことは、わたしの地下に、細々とした水脈となっているので、そこから幾許かの言葉を汲み出して、この一稿としたい。

縁有って、首都大学東京瀬尾育男教授の詩の授業で、ヤコブソンの講演の記録とソーシャルについて教わることがあったので、そのテキストを材料にして、掲題に答えようと思っ。

ひとは、常識だと思っていることは、口にしない。ましてや、文字に表すこともない。ヤコブソンの講演録「言語学の主題としての失語症」にも同じむつかしさがある。時は、1953年。第二次世界大戦が終わり、戦後の混乱が世界的にも一息つき始めた頃、この時、講演者と聴衆との間で共有していた、言語に関する知識は表立って文字で表されているわけではない。しかし、講義録の文意と行間を読んで、その核心を集合論のベン図で表すと、次のようなものになる。この場合、ひとつの円は、ひとつの概念を表す。



ヤコブソンが聴衆と共有している言語宇宙は、このような宇宙である。これは、概念による宇宙であるならば、どの宇宙であれ、この図によって表される、そのような宇宙を示している。この概念同士の理解に齟齬や支障を来しているのが、失語症の患者であって、これは譬喩 (tropes) の一次分類の能力、即ち隠喩 (metaphor) と換喩 (metonymy) に関する能力の欠損として現れる。勿論ヤコブソンが言いたいことは、概念の理解力の欠損と譬喩の理解力との関係である。ヤコブソンは、AとBの関係を、共通集合Cを共有するがゆえに、内的関係とよび、相似性 (similarity) と対比 (contrast) がある関係だと言っている。これに対して、AとDの関係を、隣接し

ているがゆえに、隣接性 (contiguity) と遠隔性 (amoteness) を有する、概念同士の外的關係といっている。私見によれば、更にEを加えて考えるべきだと思う。これは、その宇宙内のことのような概念とも隔絶して、その宇宙では他の概念と共通集合を持たぬ概念であり、それが故に、別のもうひとつの宇宙に置かれた場合には、(AやBがこの宇宙ではそうであるように)、別の概念と共通集合を有する概念となつて、新たな宇宙を創造する概念である。いづれにせよ、ヤコブソンは、EをDに含めて、Dで代表させていると考えてもよい。

さて、失語症の現象は、相似性が隣接性のいづれかに障害をきたすものとして現れる。つまり、(A、B)の隠喩か、(A、D)の換喩に関する能力に支障をきたす症状として現れる。

ヤコブソンは、失語症を言語とは何かという問いに答えるための陰面として論じているので、わたしたちは、これを陽面として、譬喩の能力の問題として考えてみることにしよう。つまり、概念の相似性とは、AはBであるという命題を構成することのできる能力であり、譬喩としては、隠喩、即ち姫は白雪だという譬喩をいうことのできる能力をいう。これに対して、概念の隣接性とは、DとはAのことだという能力であり、換喩、即ち駅でその男性を赤帽といい、童話の中でその少女を赤頭巾ちゃんという能力のことをいう。

ヤコブソンは、正常な言語行動は、譬喩のふたつの両極を行き来するものだと言っている。私達の、詩を書く能力についても同様ではないだろうか。もっと正確に言えば、詩人はCとEの言葉を求めて、これらの間を行き来する。

ベン図をみてお判りの通り、隠喩は、Cに焦点を当てて数学的にみれば、算術演算でいえば掛け算、論理演算という論理積の世界、換喩は、足し算、論理和の一種ということになる。前者は、AとBというふたつの概念を使って新しいコンテキスト、新しい宇宙Cを創造するが、これに対して後者は、あるコンテキストの中を充填するか、そのコンテキストの

内部を細緻にしてゆくだけである。ゆくだけと書いたが、あるいは換喩にも、もつと力があるのかも知れない。しかし、明瞭に、人がその力に頼るのは、この図から言っても、隠喩と、それを成り立たせている、言語の論理の力だと思われる。主語と述語と、言う形式を用い、論理積によつてある概念を発見して一行を書く。これは、論理的に無時間の文となる。それは、高さだけの文を産み出す。わたしはこれを垂直の旅と呼びたい。吉田一穂という詩人は、同じ営為をポラリゼーションと呼んでいる。

さて、ヤコブソンが言ったことを、ソシュールはどのように説明しているかを見て見よう。材料は、「ソシュール講義録注解」(1908年)。1906年の講義。

ソシュールの言語観をひと言でいえば、言語とは *langage*、機能であり、関数であるというものだ。これを言語機能論と呼ぶ事にしよう。ここにふたつものものがあつて、ひとつのものが、もつひとつのものを幾つかの規則の複合的な適用によつて(人称、数、態、話法、時称)、支配し、特に時間を支配することで従属的な関係におくことを、機能化するという。明治時代の文法家は、文法用語として、これを組織(化)と概念化し、そのように訳したようである。

機能化とは、このように関係の主従、支配・被支配を決定することなので、関係の機能化とは贅語である。このことは、二つの文の間でも成り立つし、語のレベルでも、語の構成要素の間でも成り立つ。勿論階層を上げて、節と節、章と章、作品と作品のレベルでも成り立つ。即ち、機能とは、構造を前提にして成り立つ。機能化とは、そのように構造化することと同じことと同義である。従い、ソシュールは、言語を時間と無関係に論じる。勿論、それは容易なことではない。何故なら、ひとつの言葉、ひとつの概念には、時間が含まれているから。即ち、その言葉の歴史が、ソシュールが言語を共時的にのみ論ずるわけにはいかないのは、そのせいである。

ソシュールは、言語の体系をなによりもまづ価値の体系だと考えている。価値は不可算名詞なので、単位化して、その価値をはかり、何かの性質または同

一性(これらは普通、意味といわれるものだ)として表現するしかない。コップ一杯の水、といったように。この機微を、ソシニールはチェス・ゲームとその駒に喩えている。駒の種類は、何かの性質または同一性として表現されている機能単位である。あるいは、機能といえば、既に単位化を前提にしているということだ。わたしなら、概念化というだろう。

ソシニールは、言語学を全くそれまでとは独自に打ち立てたいと思い、他の隣接諸学とも別つしてあるべきだと強く考えているので、哲学、論理学、文法学といった学の持つ用語を決して使おうとはしない。そうはしないで、言語を価値の体系として論じ、用心深く伝統的な隣接学問の用語の使用を回避する。ソシニールは、この思考プロセスの一部として、ついでに、記号学を産み落とす。さて、価値の体系としての言語の体系においては、価値というものは、前述の集合論の図でいくと、(A, B)の関係か、(A, D)の関係で論ずる以外にはない。これをソシニールは、価値の関係は互いに依存的であり、その関係とは差異だといっている。ソシニールは、Cの積算を意義(sense)、(A, B)の和算を意味(meaning)と正しく使い分けている。これらの差異の関係は、これら語のレベルに降りて来ても、既に述べたように、機能的である。ソシニールは、この機能単位を創り出すのは意義Cであるとはつきり言っている。哲学や論理学ならば、前者は内包(intensive)、後者は外延(extensive)、あるいは、類概念と種概念ということだろう。これらは、同じものの別の名称である。ソシニールならば、同じ価値の、と言うだろう。価値はどこにも還元することができないものとして、ある。また、価値の体系というとき、ソシニールは、社会的集団の存在を前提にしている、その方の類比として、社会を機能の集合だと考えていると思われる。そうして、個人や社会の表に現われている意志から「滑り落ちる」もの、即ち人間の無意識の領域、眠っていても脳中にあるものが、言語の全体だといっている。これが、ソシニールの言語学の対象である。

さて、機能単位の問題を論じて来て、ソシニールは、「言語的実在の問題」を論ずる。この場合の「実在」

は、英語でいうentityに相当するフランス語であると推測する。

ソシニールは、実在を認識するとは決して言わない。認識という哲学用語を避けているのだ。それでも、しかし、それでも、これは認識の問題であり、概念化の問題である。Entityという実在は、そのまま機能的な単位である。その実在がひとつの概念であっても、その概念は機能的な単位である。これが、ヤコブソンの集合論の図による言語論と、ソシニールの言語論の接点であり、双方のrepresentation(対応関係)の基本である。

そうして、ひとつの実在を認識するとき、ひとは既にもうひとつの実在を認識していて、双方を比較し、差異を認め、従って、それぞれを互いに単位化して、機能化する。これをソシニールは、繰り返し、人は紙きれの表を切るときには、裏も同時に切らざるを得ず、表だけを切ることはできないという喩えで説明している。

結局、ヤコブソンとソシニールの言っていることをまとめようとすると、わたしは何がいいのだろうか。

言語(組織)とは、機能、即ち何々するということが、何々であるということの集合であって、それは、人間が、人間と社会の地下に眠る無意識に関し、認識によって発見する実在(entity)を組み合わせ、概念化(機能単位化)することによって、ある価値の体系(システム)を創造することをいう。

ということになるだろうか。

何だか随分と単純で、却って難しいことを書いたような気がする。

勿論、その宇宙を何次元に設計して創造するかは、そのひとの自由である。言語的な自由とは、このことだと思ふ。現実的な社会は、いつも個人に一つの定義を一次元のものとして強制するにせよ。

そうして、詩的言語を問題にするときには、ヤコブソンの譬喩に関する理解に戻ることが、よいことだと思ふ。

December 1, 2007

言葉の零と「空」

通俗としての言葉、というふうなことで何が思い浮かぶかといえ、おおく人口に膾炙した言い回し、格言、諺、格言化や諺化した詞華などが挙げられる。言葉は色褪せたメタファーである、という説もあるくらいだが、定型的な言い回し（神ならぬ身の知るよしもない、等）、諺化した詞華（物言えばくちびる寒し、等）など、これは言葉が通俗化するあの種の避けがたさを表しているといえるのかも知れない。ある意味で、通俗としての言葉は、本来通俗的でない言葉を持ち運びやすくしている、ともいえる。ただし、それが言われた当初の新鮮な精髓は、言葉を「持ち運びやすく」する過程で失われているのだが。言葉が古びやすい、とはこのことの謂いだ。

現在は十数年前、数十年前、百年前、いや数年前に較べてさえ、きわめて言葉が持ち運びやすくなっている時代（の一つ）にいよいよ突入したのだとの感が深い。私が青少年だった三十数年前でさえ、言葉がその本質から離れた形で、容易に通用してしまう事態は存在したと思う。通用することに異を唱えているわけではない。言葉が聴き取られ、理解され、魂に届くなら、多少の聴覚映像や概念、文字上のぶれは問題とならない。問題は「スルーする」というのはやりの言葉に参照されるように、言葉がどれほどの具体性を持つて聴かれ、それに基づく判断が為されているか、否か、ということだ。

最近出た本の中のこんな部分に目が行った。次に引いてみる。

（前略）言語もまたこれらの一環に置いてみるなら、「こと」あるいは「ことば」と言って、けっして「形式名詞」の「もの」を使ってほしくないと、前回に述べたところに行きつく。

まさに言語ははげしい、動態的な在り方であり、事柄Ⅱ「こと」に対応する、未来を記憶する、能力に淵源する。それを死屍のように「もの」化する、「形式名詞」こそは真犯人として告発されるべきであろう。（藤井貞和『詩的分析』、2007年、書肆山田、p408）

この場合の形式名詞としての「もの」は、いうまでもなく、形式名詞「こと」としばしば混用される場合が多い言葉だ。藤井氏の例示をここに引けば、「昨日起こった（こと、もの）」「彼女とのあいだにある（こと、もの）」「きみの（こと、もの）が好きだ」「敵討ちという（こと、もの）」「竹取の翁といふ（こと、もの）」「ありけり」等々である。こと、もの、どちらでもありそうな場合と、両立しない場合が認められるであろう。

ちよつとした手続きが必要そうな、やや難しい問題も含むけれど、やはり言葉はものではなく、事態なのだということを確認しておきたい。通用する言葉、通俗としての言葉とは、「もの」としての言葉なのだ。折口信夫によれば、日本語における用言と体言の別を見いだしたのは中世の連歌師たちであるそうだが、その言は「動く言葉、動かない言葉」といったふうな区別であったようだ。「動く言葉」は、たとえば「燃える火」の「燃える」のごときもので、「動かない言葉」とは、「燃える火」の「火」のごときもの。ただ、これを現実の叙述空間の中に投げ入れてみた場合、一文「燃える火」というのはそれ自身事態、動態にほかならず、文を解剖したところで得られる「動く、動かない」の区別が無意味なようにも観ぜられる。「動かない言葉」であるはずの「火」でさえも、「火。」と言うか書かれたそのときに、純粹な名詞にとどまっていられるのである。

うか。名詞というより名一辞といったほうが（日本語として）通行している現実の姿に近い。現実の言葉という叙述空間以外のところで言語を考えることは、実際には不可能なのではあるまいか。たとい名詞が端緒に「もの」的なものであったとしても、それが現実の言語であるためには、つまり叙述の空間の中では、名一辞として一つの事態にほかならない。ウイトゲンシュタインの後期に『哲学探究』というノートがあるが、そのなかで有名な一節がある。すなわち「語の意味とは、言語の中に於けるその用法である」。適用のうちに言葉はその姿を現すのであって、目録や語彙採集帖のなかに言語の家があるわけではないのだ。言葉が「もの」ではないというのはこういうことなのだと思う。

ではなぜ、ことばは「もの」化してしまうのか。たとえば「文化」ということがらを考えるとき、以下のような記述から始まる思考を私なら念頭に浮かべる。

動植物の種や変種の名を詳細に書き出すために必要な単語はすべて揃っているにもかかわらず、「樹木」とか「動物」というような概念を表現する用語をもたない言語のことは、昔から好んで話の種にされてきた。ところが、「未開人」の抽象的思考への不適合性と称されるものの例としてこのようなケースを挙げるとき、まず第一に人びとは、抽象語の豊富さはただ文明語のみの特徴でないことを証明する他の例がいろいろあることを無視してきた。（レヴィ・ストロース『野生の思考』冒頭）

ここから文明とされていることと未開に属するとされていることとの優劣の無さ、互いの互いに対する相対性——というよりむしろ「文明」の相対性とは「文化」の違いにほかならないことが、めくるめくばかりに展開されてゆく。初めてこれを読んだとき、私などは驚倒したものだ。しかし、最近では大学関係者やちよつとした知識的なことに関わる人々のあいだで、ある場所で常識とされていて、

それとは異なつた場所で同じことが常識でない、といった程度のことだ。「ああ、それは文化の違いね」というふうな使われ方をする。最近の中学生が使っていたとしても私はおどろかないと思う。

おなじようなケースでは、これも二十年以上以前の話だが、ある文学学校の関係者に、網野善彦の仕事について、ひとところに較べ、ここ最近あまり派手やかに取り上げられていないようだがどうしたものか、というようなことを言つた返事が、「網野ももう古いし飽きたなあ」というものだった。たぶん古いのではなく、はやらなくなつただけであつて、網野学が古びているというよりは、やはり磨りのステージを、もうそれは脱していることの証左であつたことだろう。確かに当時の新宿ゴールデン街あたりでは、酒のつまみにミノはもう飽きられていたのだろう。

これらは言葉が「もの」化している例である。ほかに「地球に優しく」や「病氣を見て病人を見ない」や「いのちの大切さ」や「有機」や「無添加」や、……こう列べてみると、さいごの碧の範囲がいよいよ狭まる観さえてくる。逆にこれらの言葉と裏腹な、無視や差別や加虐や暴力からなる、恐るべきパブリズムの進行が、却つて窺われたりもする。事態、動態として伝えなければならぬ事柄が、動きを止められて抽象的かつ記号的な貨幣みたいになりとりされ、交換されている。マルクスの言うなら、この「もの」化を疎外ととらえ、これへの反措定としては言葉の使用価値の側面を考えるだろう。レヴィナスなら、この「もの」化を全体性のカテゴリーに位置づけるとして、事態、動態としての言葉を、恐らく永遠性のうちに措定すると思う。

実に言葉の「もの」化の傾向は已みがたいと言わねばならない。じっさい、ある言葉を理解するというのは、その事態、動態に到達するということなのだが、そのために、言葉は「もの」の側面を一度はくぐる必要がある。

ある事態、動態が存在するとして、そこから言葉は単なる思いに留まらず、分節された

現存として、いったん「可視」とならなければ、叙述空間のうちで生きて動くことはできない。これが言葉が一度は「もの」化するということである。いちおう、聴覚映像であるか文字であるかは置いておくが、少なくとも言葉の現存は単なる自然光や自然音等の知覚・感覚の対象たるにとどまらない。知覚・感覚を「通じて」到達する何ものかといえる。否むしろ、この「何ものか」を通じて知覚・感覚そのものが統御し返され、却って幻想的に変容せしめられる、そういった機構を考えたいほうがよいかも知れない。いちおう、この機構のことを叙述空間と考えておいてもいい。

このなかで、幻想的に変容した一音一字は単なる音や線ではなく、言葉の内なる一音一字であり、ときにそれだけで叙述性能を持っているが、なぜそれが可能かといえ、可視的な部分に動揺を与える不可視の部分が、可視的「もの」的な面の裏側にびったりと張りつくような属性として存在してあるからだ。不可視のもの一切は可視とならないが、その痕跡のようなものなら示すことができる。すなわち、文字「火」ではなく、陳述「火。」であるところの「。」の部分がそれだ。これを時枝誠記は零記号と呼んだ。事態、動態は「。」の譬えるものに押し上げられるようにして「火。」という叙述になる。このとき事態、動態を相手に（不特定多数であれ）伝えるための可視的な部分が、「。」を脱落させた形の「火」となるところで、言葉の「もの」化が始まるといえる。伝達することは避けられないとはいえ、この脱落は具体性の脱落とも言い換えられ、言葉にとつての外部の消失とも考えられるだろう。

この「火。」はまた、火についてのあらゆる陳述を含むともいえる。これを有り体に言え、言語には不可視の零が必ずついて回るということだ。別の例を考えてみる。「秋は美しい」という陳述は、「と、彼女が言うのを私は聞いた」というのに始まり、「のはAの想像で……」という具合に、接続詞や、外国語で言えば関係代名詞を用い、無限の階層からなる

一文を考えることができる。これは「火。」や「秋は……」に無限数の階層が凝縮されて詰まっている、というふうに見えるよりは、それらが零を持つということなのではないか。いわば、そこからいつでも発動し、ほとんど無からでも（可能性としては）無限に展開させることのできるギアみたいな、言語の関数としての零。したがって、生成文法の概念図のような空間性としてよりは、ある時間的な出来事として、いわば音楽的に言語をイメージすることもできないだろうか。時間性とはいつても単純な一回性の過ぎ行きでなく、ワグナーやモーツアルトのごとき時間の楽音が、過ぎ行くことそのもののうちの、或る構造的な天空の内部で舞っているような。

「もの」化された言葉においては、この零が構文を支えるためだけの最低の喫水線で使われる。叙述というより符牒といったほうがよい。事が言葉の問題だけに、これを脱するための言葉は屋上屋の感をいずれも免れない。私は一つのヒントとして、この問題をほんの少し、仏説の中に覗いてみようかと考える。

現在通常に流布している仏教は、諸宗あるけれど、だいたい「空」の思想を教義の中心に据えているかと、大まかには言うことができる。不増不減不生不滅、というところからいって、ものやことはみな、「存在する」とつきつめて考えるとどうやら怪しいし、「存在しない」とつきつめて考えても、何だか違うようだ。有るか無いかの二分法でなく、そこに立体的な第三の支点として、ものやことは存在しつつ存在しない、存在しないことがすなわち存在することである、すなわち存在と非存在の別は空にほかならない、といった、有・無に涉らぬ「空」の観点が導入されてくる。

いわば、陰影をつけずに三次元を感じさせるような、平面に描かれた立体そのものともいえるべき、クラインの壺やエッシャー空間を思いつくかべると割合理解しやすいかも知れない。こういった思想を有する教えでさえ、言葉の問題、つまり言葉の「もの」化には旧来より悩まされてきた。いや、と言うより、言葉

の問題と向き合うことに、端緒から仏教は大きな関心をさし向けてきたとさえ言える。

基本的に事態、動態であるべき言語が「もの」化するとき、伝達の過程が必ず介在している。言葉は伝わってこそその機能ないし存在なのだということを、再確認しておきたい。伝達の過程で起きるこの言葉の「もの」化について、仏教はどんなふうにかえ、解決してきたか。言葉に関してきわめて潔癖と、一見見える考えと、言葉に関して非常にしどけないと、一見見える考えとがいちおう挙げられる。

前者については、『正法眼蔵』にこんな話(公案)がある。かいつまんで紹介する。ある僧が師に問うた。祖師西来意とは何か、つまり達磨がインドからやって来たことの意味(仏道開闢の意味、か)とは何か。師は答えて言う「庭前の柏木」と。僧は言う、「喩えで示さないでください、祖師西来意とは何でしょうか」。師「私は喩えで示したわけではない」。僧「(ではもういちど聞きます)祖師西来意とは何でしょうか」。師「庭前の柏木」。

この人を喰ったような話は、ものやことを有・無に涉るところでなく、「空」という第三の立地点から眺め下ろしているわけで、言葉の「もの」化に対して幾重にもバリケードを立てて抗しているといえる。意味は言葉の内部からでなく、つねに外部からやって来て、道を問う者に痛棒を食らわせる。これが進むと、「釈尊はさとりを開いてから涅槃にいたるまで種々に説法したが、そこで説かれたものは何もない」(中村元)という、「一字を説かず、また已説せず、また当説せず」(楞伽經)の不立文字の世界に行き着く。壊れやすい、汚れやすい言葉をもって説かれたことは何もないけれど、伝達は「空」を通じ、おそらくは言葉以上に堅固に果たされているのである。これと相反するような、言葉に対するしどけなさは、いわゆる「方便」の考えの中にみとめられる。おなじ『楞伽經』に、こんなところがある。

如来蔵は本性清浄なり。(略)如来応、正等覺

の、性空と実際と、涅槃と不生と、無相と無願等とのもろもろの句義をもって如来蔵を説けるは、愚夫をして無我の怖れを離れしめ、無分別無影像のところ、如来蔵の門なりと説かんがためなり。(略)たとえば陶師の泥聚の中に、人功、水、杖、輪、繩の方便をもつて、種種の器を作るがごとし。如来もまた爾り。

要するに相手に合わせ、教えに合わせ、使えるものなら何でも使つて、とりあえずの橋渡しをする。とりあえずの時間が過ぎたら過ぎたなりに、また違う材料を使つて、ブリコラージュ(日曜大工仕事)みたいに教えを説く。なんだったら、言葉の「もの」化さえ、利用するかも知れない。本性清浄である無分別無影像というのが始めにあつて、壊れやすい、汚れやすい、かりそめの言語の姿は、かりそめゆえにあらゆる細部に涌出して、時として金剛のパワーを発揮する。本性清浄というところが、同時に無分別無影像である点に与つて、方便は巨大な力であり得るのである。注意してみると、言葉はここでも不立文字の場合と同質の「空」の性格を持つといえる。言葉は言葉に内向きではないのだ。

田村隆一の詩に「言葉なんかおぼえるんじやなかった」という一節があるけれど、今まであらあ述べてきた「空」の思想を思うと、田村ほどこの思想を体現した日本の戦後詩人もいなかったのではないかという気がしてくる。先の祖師西来意の公案も当然そうだが、言葉ではなく、かといつて虚無でもない、まさに清浄な「空」に満たされている感じがあつて、「荒地」の頃でない田村の長い戦後(それは同時に彼の長い長い晩年のようなものだが)、その詩は無類の色彩とマチエールを有して、言葉ではあらわせない事態、動態を、言葉でもつてまさにあらわしつづけた。

この「空」は、言語の零に似てはいまいか。言語の外部が、ほんとうは言語自体を生きさせているという点において。

confidence

死によって中断された物語や曲は、我々とは別の高みにあるように思う。

ルネ・ドーマルの『類推の山』は、句点で閉じられることさえなく、一四曲あるシヨパンのワルツは、ディヌ・リパッティーによって、一三曲しか弾かれなかった。

書かれるはずだった物語、弾かれるはずだった曲は、他の活字や音で補われることなく、予感と微光に満ちたまま残される。

昨年十二月に書肆山田から第二詩集『大地の黄身』を出しました。

この場を借りて、宣伝させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。(後藤)

あつという間に師走になってしまった。手元の手帳を今年の元旦からパラパラとめくってみて、そう思う。その間に、いろいろな出来事があり、苦しみもあったことが、文字や記号の合間から思い出されるが、一切の言葉を封じて、はや師走だ。(岩田)

わが師からの手紙。「『文』というものから遠くなりました。」「たしかに『文』は時空をこえて、人に伝えるものがありますね。」文、から遠い世界は魅力的だ。文、が時空を超えて人に伝わることも魅力的だ。

年が明けて早々に娘の結婚式があるので、この年末、ばたばたしている。原稿さばらせてもらって大助かり。5月から、いよいよ家づくり工事を開始する。計画の細部を詰めねばならないのだが、机上の空論

に傾きがち。こっちの方がむしろ、ばたばたしているかも知れない。(木村)

ここ数年、小沢昭一の『私のための芸能野史』、『私は河原乞食・考』、『日本の放浪芸オ리지ナル版』といった本が次々と文庫に登場しているのは喜ばしい限りだ。私は一九六〇年生まれなので、オトナになってからは旅芸人と呼ばれるような人たちを見かけた記憶はあまりないのだが、子供の頃には確かに見たことがある。

六〇年代に出かけた柴又帝釈天では、リズムよくはさみを鳴らして飴細工を作る人から目が離せなくなったものだし、七〇年代の初めの上野公園あたりでは、まだ怪しげな話をして怪しげなものを売っている人がいたと記憶する。特に後者などを面白がって見に行こうとすると、あの人たちは恐いから近寄るなど大人が手をひっぱったりするのだった。

今考えると、「恐いから近寄るな」と言われて実際に恐怖を感じた(連れて行かれて帰れなくなるとか言われたのかもしれない)のは、貴重な経験だったと思う。あれが、差別意識というものだったのだ。もちろん、差別意識を持ったことが貴重な経験だったのでない。差別意識から逃れるのが難しいことを身体が覚えたことを言っているのである。

もっとも、差別意識といっても、下に見えるという一色の感情ではない。誰もが持っているわけではない技能を持っていること、遠いところを色々知っているらしいこと、その他何やら魅力的なものを持っている

ることに対するあこがれの気持ちもあつた。何やらあちらの世界には、こちらにはない自由があるように思ったようだ。

小沢昭一の前記三冊は、そのような差別意識やその裏返し of 崇拝に足を引っ張られることなく、自身俳優である小沢氏が自分との距離を測るようにしてさまざまな芸人の世界を描いた作品だ。これと並行して、レコードの『日本の放浪芸』も製作され、これまた、今世紀に入ってからCDで再登場したのだが、私はまだ入手できていない。

たぶん、こういう芸には叙事詩のエッセンスがまつていたのではないかと思う。今、それを本で読もうがCDで聞こうが、それらの叙事詩に本当に触れたことにはならないだろう。神は死んだのだ（神々はとらうべきか？）。とは言え、人はまだ生きており、詩を必要としている。ただ、昔を懐かしむというだけではなく、今を生きるためのヒントがこれらの本やCDには隠されているのではないかと思っている。（長尾）

現在、骨髄移植の必要な患者さんを担当しています。移植の可否はHLAという一種の遺伝子情報で決定します。移植を受ける患者さん（レシピエント）と骨髄を提供する側（ドナー）のHLAが適合するかを調べます。患者さんの血縁に適合者がなかった場合、今度は骨髄バンク登録者の中からドナー候補を探すこととなります。

私の担当患者さんは、幸いバンクから候補が見つかりました。候補者のリストには、北海道から沖縄まで、まさに全国区から検索された方々が数名、アップされています。この方々には更なる検査を受けて頂き、最終的に一人が選ばれます。その方から採取させて頂いた骨髄は陸路あるいは空路で、はるばる患者さんのもとに運ばれてく

るのです。

骨髄の提供は無償ですし、バンクのドナーとレシピエントが互いの素性を知ることはありません。私たち医師にもドナーの個人情報知らされません。ドナーが見つかること、無事に移植までこぎつけることは、ある部分で、顔の見えない相手の善意に、大きく寄ることなのです。

私たちは普段の生活の中で、時に顔の見えない相手から悪意を投げつけられ、やり場のない苦しみを味わいます。しかし逆に、顔の見えない相手の善意が、たったひとつの命を救う唯一の手段となり得ることを、今回のケースで実感させられました。

顔の見えない相手の善意といえば、献血も同じです。ところで私はこれまでに献血をしたことがありません。こういう職の間ですから非常に恥ずかしいのですが、自身の体調の都合です。いつの日かキッツリ400ml献血をすることが、大きな声では言えない私の夢です。（鈴川）

この冬の一番の驚きを挙げるとすれば、おそらく「インターネット・カフェ」との出会いでしょう。

僕はこのごろ、夜の2時頃に目が覚め、そのまま眠れなくなってしまうことが多いのですが、そんな折、行き場がなくなつて、駅前のインターネット・カフェに足を踏み入れたのが始まりでした。

僕のスタジオは確かに暖かく、猫もいるのですけれども、「図書館に行く」と勉強がはかどる」という都市伝説のとおり、インターネット・カフェには（僕にとって）パーソナル・コンピュータしかないのです。気が散ることもなく、コンピュータの勉強ができるのです。しかも、目の前にあるのがインターネットに接続されたパーソナル・コンピュータですから、何か分からないこ

とがあれば、Google等の検索サイトで即座に答えや関連する情報を充分に得ることが出来ます。また、ネットジャンキー達にはそれぞれのブースがあてがわれ、他の利用者との顔をあわせることがほとんどありません。これは、対人恐怖症の僕にとって何にも替えがたい、聖地のような場所なのでですね。

図書館の閲覧室では飲食は禁じられています。インターネット・カフェではドリンク飲み放題、食事も持ち込みOKと、ながら族の僕などは、最初このシステムを知ってびっくり仰天したものでした。気になる料金ですが、3時間で980円、6時間で1,600円、10時間(!!)で2,500円となっています。3時間では慌ただしく、10時間では座りつかれてしまうため、余程のことがなければ、僕は6時間のコースを愛用しています。

インターネット・カフェの数多ある利点をひとつ挙げるなら、オンタイムでメールが使えることです。僕達ネットジャンキーにあてがわれているパーソナル・コンピュータは、型落ちの中古品などではなく、DELL DIMENSION 8400 (CPUは3GHz!)です。メモリは1GBと少々少なめですが、僕は最先端のゲームをやるわけではないので、これで充分です。朝一番、DELL DIMENSION を立ち上げて、知人の携帯電話にメールを出す。こちらはWebメールを使っているのです。DIMENSION にメールのアカウントがなくとも、少しも困ることはありません。

日中でも自然光がまったく差し込まないこの空中庭園で、今日も「持ち込み」の本を読み耽るのです。(野村)

N響アワーで、ネヴィル・マリナーのブラームス4番を観た。82才。品格というの

は、こういうことを言うのだ。

インタビュで一番おどろいたのは、学生マリナーのピオラの師でもあったピエル・モントゥーが、ブラームスのピアノクインテットを、ブラームス自身と一緒に弾いたという話。ピアノはブラームス。

ニワカには信じがたいとはこのこと。「春の祭典」の初演、というイメージからついこないだの人のような印象のモントゥーが、教科書の中の人「ドイツの3大B」と共演していたとは!

ひっきよう歴史というものも、重層しつつシンクペーションもして、しかも見えなほどの大きなフーガを成す、というオンガクのつくりとそっくりな姿でもって現前する――。

ブラームスの交響曲第4番は、かなしい晴れた空に見えない階段を積んでいく、みたいな変奏だけでできている。

「Allegro energico e passionato」は、第4楽章の速度標記。(和田)

最近、この生麦という小さな町も、荒んできた気がする。パチンコやスロットの店は前からあったが、店内の音が路上までやけに大きな響きで聞こえてくる。そこへ出入りする人間が増えてきたのだ。コンビニの前では、チューハイの缶を手にしてタバコを吸っている中年や老齢の男の(時に女の)しゃがみこんだ姿が、気がつくときと変に眼につくようになってきたし、そこに群れている中学生くらいの少年や少女のガラスを引つ掻くみたいな冷たい哄笑は、横浜の下町というより、ホガース描くところのロンドンの下町といった感じである。あるときその通りでヤツケを着た若い男とすれ違ったが、百円か二百円くらいの太巻きを寒風のなか歩きながら齧っている、その暗い眼の凄まじさに慄然とした。それがその

日のその男の三食を兼ねたものなのだろう。封建時代といわれる時世ときよでさえ、経世済民ということに「支配者」たちは心を砕いてきたものなのに、この開明的なお国の無策無能ぶりは、蛮行と相同じい。(倉田)

2007年に見た映画(DVDも含む)で、印象に残ったものベスト3。スコセツシ『タクシードライバー』、市川準『トニー滝谷』、山下敦弘『天然コケッコー』。山下監督は今年日本で一番のっっている若い監督だ。彼の作品は今年旧作を含め2本見た。ささやかな設定の中で人間を大きな気持ちや自然の中に置く。市川監督の作は3年前のもの。非常に品がいいが奇妙な話。奇妙な話の中に宮沢りえを置くとなれば力を発揮する。それが大きな発見。最後にスコセツシは70年代からきちんとアメリカの地方性を意識していると思った。ベトナム帰りのデ・ニーロ扮するタクシー運転手が汚濁にまみれた世界に刻々と怒りをつのらせていく様子が圧巻。理由なき犯罪と称するものに理由めいたものがないわけではないのだと思った。この映画の批評性のひとつだと思う。この3本に共通性を見出すのは無理があるけれど強いていえば人間を大きな広がりの中に置いていること。次に異邦性の問題。デ・ニーロが帰還兵、トニー滝谷の父も戦後大陸から日本に帰る。天然コケッコーは転校生の物語。新年は何が僕を移動させるだろうか。(石川)

今回は本編の方は休ませていただいたので、あとがきだけの登場です。

二〇〇七年は詩作の方はだいぶ低調になってしまったけれど、ことばと声についてはいろいろ考える機会が多い年だった。

「tab」の散文にも書いてきたけれど倍

音唱法「ホームメイ」の修行を始めたのが最も大きな事件だった。これは人間の声の可能性について、まったく新しいビジョンを与えてくれた。半年ちよつとだからまだまだひよつこなのだけれど、年末には人前で演奏する機会も得た。声の芸に一層磨きをかけていきたい二〇〇八年である。

ホームメイの経験はこれまで取り組んできたリーディング活動についても、根本的な反省を迫るものとなった。詩を読むときの「声」がはらむ問題について、これまであまりに無頓着だったと思う。また、無頓着すぎる朗読者が多いとも思うようにもなった。今年リーディングについても新しい方法論を模索する時期になりそうだ。

あと、これまで書いてきた詩をきちんと詩集の形にまとめたいと思っている。これからの詩作のためにもそれが必要な気がする。

野) 本年も宜しくお願い申し上げます。(高)